

Anthropological Studies of Whaling

(Senri Ethnological Studies no. 84)

Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi and
James M. Savelle (eds.)
国立民族学博物館 / 2013 年



インドネシアのマッコウクジラ漁 (2007年5月、インドネシア・レンバタ島ラメラ沖、小島曠太郎撮影)。

人類は5千年以上前からクジラを資源として利用してきたが、20世紀初頭に始まった大規模な商業捕鯨によってクジラの数は一激減した。そして1972年にストックホルムで開催された人間環境会議において米国はクジラを守れずして自然環境は守れないと主張し、その捕獲禁止を提案した。その提案はすぐに国際社会から受け入れられることはなかったが、1982年に国際捕鯨委員会は13種類の大型鯨類を対象とした商業捕鯨の一時停止を決定した。

日本では1988年3月を最後に大型鯨類の捕鯨を中断し、それから約30年の歳月が経った現在、若者たちは捕鯨や鯨肉料理にほとんど関心を持っていない。さらに大規模な国際環境団体や動物愛護団体はクジラを神格化し、自然保護のシンボルとして祀り上げ、活動に利用している。このように現在、欧米社会を中心に反捕鯨の勢力は増大しつつある。

本書の目的は、世界各地で行われている多様な捕鯨や鯨食の歴史と現状を報告し、比較検討することである。本書は、捕鯨に関する人類学的研究のレビューである「巻頭論文」、第1部「歴史的な視点からみた捕鯨」、第2部「先住民生存捕鯨と地域捕鯨」、第3部「日本および韓国周辺海域における捕鯨」、第4部「捕鯨の争点」、および「結び」からなり、全体で18本の論文を掲載している。本書は共同研究「捕鯨文化に関する実践人類学的研究」(2008～2010年、代表：岸上伸啓)の成果を英文で公開したものである。

巻頭論文では、考古学と文化人類学における捕鯨研究を概観した上で、日本人研究者による学問的貢献を中心に紹介する。第1部では、1800年代にハワイに立ち寄る欧米の大型捕鯨船が多数のハワイ先住民を乗組員として雇用していたことを紹介し、1840年から1880年までのホノルルの捕鯨船とハワイ人船員について歴史資料を分析、検討している。

第2部では、国際捕鯨委員会における先住民生存捕鯨の概念と成立の経緯を明らかにし、アラスカ先住民、ロシアのチュクチ、カリブ海のベクウェイ島民による先住民捕鯨を現地調査に基づいて紹介している。それらの事例は、規模や使用する道具類、捕鯨方法、商業性の有無において違いが見られることを示している。さらに、国際捕鯨委員会の管轄外で実施されている先住民による大型鯨類の捕獲について紹介している。江上幹幸と小島曠太郎は、インドネシアのラメラにおける伝統的なザトウクジラ漁とその変化について記述し、考察を加えている。また、渡部裕は現在では禁止されているカムチャツカ半島とサハリン島におけるかつてのシロイルカ漁について報告している。

第3部は、日本および韓国周辺における捕鯨を取り扱っている。岩崎=グッドマンまさみと野本正博は日本の先住民アイヌによる伝統捕鯨と明治時代以降に日本の本州から伝わっ

てきた小型沿岸捕鯨について紹介し、論じている。赤嶺淳は日本における鯨食や鯨料理の展開を歴史的にたどりながら、第二次世界大戦後に鯨料理が国民食となった経緯を跡づけるとともに、大量の鯨肉が魚肉ソーセージの材料として利用されてきたことを指摘している。遠藤愛子は、沖縄のイルカ漁とその肉が日本各地にどのように流通しているかを市場の分析から詳細に検討している。丹野大と濱崎俊秀は、2008年に東京で実施したアンケート調査の結果をもとに鯨肉料理の普及を促進したり、阻害したりする要因について分析している。

捕鯨や鯨食が途絶えていた韓国南部では、明治時代にロシア人や日本人がウルサン地域を拠点として近海で捕鯨を行ったことをきっかけに、再び鯨食文化が定着した。1982年の捕鯨の一時停止決定後も漁網にかかった混獲クジラを食べることにより鯨食文化は継続している。李善愛は、韓国南部ウルサン地域における鯨料理を紹介している。

第4部では、捕鯨をめぐる国際政治問題と反捕鯨運動に焦点を合わせている。M・ヘイゼルは、オーストラリア政府がとってきた反捕鯨という政治的立場を、日本とオーストラリアとの国際関係から論じている。河島基弘は、反捕鯨団体「シーシェパード」の過激な振る舞いが自警団のようであることを指摘している。D・グッドマンと森下文二は、国際捕鯨委員会の近年の活動を検討することにより、同委員会が捕鯨のためにクジラ資源を管理するという本来の機能を失い、捕鯨を阻止するための団体になっていることを紹介し、検討している。

以上の論述で、筆者らは現在でも世界各地に多様な捕鯨や鯨食文化が存在していることを明らかにした。さらに、クジラを捕獲し、食べることは、人類の長い歴史の中で培われてきた人類とクジラの関係のあり方のひとつであり、クジラ資源が持続可能ならば、捕鯨自体には問題はないと主張する。

本書では、グリーンランド、フェロー諸島、ノルウェー、アイスランドの捕鯨やオセアニア地域におけるイルカ漁の事例を取り扱うことができなかった。また、捕鯨や鯨食文化に焦点を合わせたため、ホエールウォッチングや水族館のクジラ展示という近年のクジラをめぐる動きや捕鯨に反対する人びとのクジラ観や反捕鯨運動について十分に検討することができなかった。これらのテーマは今後の研究課題としたい。

文 岸上伸啓

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専門は文化人類学、極北先住民研究。アラスカのイヌピアットやカナダのイヌイットの文化や社会変化を研究している。編著書に『捕鯨の文化人類学』(成山堂書店2012年)や『開発と先住民』(明石書店2009年)などがある。